

The Association of Liquid Filtration and Purification Industry

LFPFI News Letter

Summer 1999 No.8

金属多孔質体



自然に、或いは人工的に、この世の中には多種多様な多孔質体が存在し、我々の環境づくりや生活に役立っている。

クリーンテクノロジーの一役をになう多孔質体は、その材質、孔の分布、大きさ、密度等々千差万別の性質を持っている。例えば金属を素材とした多孔質体の応用例として、その強度、耐圧、耐食性等を適用させて、固液分離をはじめとし、発泡、消音、粉体輸送、整流、防爆等に利用されることは周知の通りである。

かつて魚のように、人(ダイバー)も潜水艦も“人工えら”を使って長期間浮上せず海中生活をする為に海水に含まれる0.8%の含有酸素を取り出す試みが行われた。それには高分子透過膜と積層金網焼結体の組み合わせがモジュールとして使われ、一応は成功しているが実用には至っていない。

又、クリーンエネルギーとして水素が注目され多方面に利用されつつある昨今、その周辺技術の一つに水素を貯蔵したり発熱、冷却の作用をする水素貯蔵合金がある。一円玉位の大きさで、缶ビール2個分位の水素を吸い込んだり吐き出したりする。

金属のかたまりが何故そんなにたくさんの気体を吸い込めるのか？ これは多孔質金属なのかと

いうと、一般的に言われる多孔質体と違い、どうやら金属の結晶格子構造間に水素原子がもぐり込んでいくらしいので、空間があるといえばあるが、スポンジのような構造とは違う。この金属のかたまりも水素を吸ったり吐いたりしているうちにミクロンオーダーの粉に分解していく。

ろ過装置も究極は人体の機能のようなものが出れば理想的だと言われている。人間は何を食べなくても必要な時と場所を得れば、ちゃんと固体と液体に分離されて出てくる。あれやこれやを考えると、清澄化工業会のような各分野の専門家の英知を結集して環境浄化ロボットでも出来れば、清掃車が混雑している日中の町中を更に排気ガスを出しながら分別ゴミを回収して廻らなくても済む。

静かになった夜の町をそのロボットが、ゆっくりと金属でも何でもゴミを口からムシャムシャ食べて歩けば、体内に溶解炉みたいなものまで内蔵しなくても機能膜やバイオリクターなどなどで処理されていく。

夜中にこんなロボット達が町を歩きまわるのはいさ無気味ではあるが、愉快でもある。

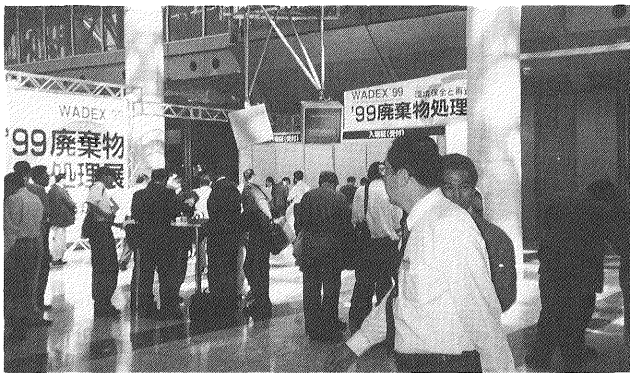
理事 汐見一光

富士フィルター工業(株) 取締役社長

展示会・学会報告

廃棄物処理展

平成11年5月25日～28日の4日間、東京ビッグサイトで(株)日報の主催、関係中央省庁他の後援による廃棄物処理展が開催された。本展示会は平成4年を初回に年々規模が大きくなっている。今年には455のメーカー、団体が展示に参加した。海外からは日本貿易振興会が欧米、オセアニアの環境関連企業55社を、韓国機械工業振興会は韓国企業11社を紹介していた。展示内容は生ゴミ、汚泥、プラスチック、金属、木材、紙、排水等の様々な材質、組成、形状の廃棄物に合わせ、分別、粉碎、圧縮減容、乾燥、焼却、リサイクル等の技術、装置の紹介がされていた。ここでは主だったものについて紹介する。



会場入口風景

生分解性の有機廃棄物は発酵技術を用いた設備が主であった。特に肥料等にリサイクルするコンポストタイプと消滅減容タイプが多く紹介されていた。設備は一般家庭用から、産業用の大型装置までであるが、各社のセールスポイントは各々で開発した特殊な菌類、酵素、分解促進剤を添加混合することによって、分解時間、分解効率を向上させる点である。コンポスト型で約1日、消滅減容型は2週間以上の処理時間が必要という。木材、汚泥、プラスチック等は燃焼設備が主であったが、ほとんどの施設が高温燃焼によるダイオキシン類対策型であることを強調していた。また、炭化して燃料補助材、土地改良材等にリサイクルする炭化技術があった。廃棄物を粉碎し、リサイクル用途に合わせ球状、棒状等に成形して炭化するも

の棒状等に成形して炭化するものである。素材によって炭化温度が異なるが、有機物であれば大抵のものは処理可能だそうだ。しかし、得られた炭は吸着能は低く、活性炭の代替は難しいようだ。

また、全体的な印象として、ISO14001支援ソフトの紹介や、市民団体がリサイクル事業のブースを設けて参加しているなどから、企業において環境管理が一般化されていること、市民まで浸透した社会的関心が高くなっていることが伺えた。展示品も実装置を持ち込んだブースが多く、廃棄物処理施設市場に対する企業の大きな期待と意気込みが見えた。展示以外にも廃棄物処理実務に拘わるセミナーやパネリストを迎えてフォーラムも開催され、盛大な展示会であった。

＜日立プラント建設(株) 奥野 裕＞

国際食品工業展(FOOMA-JAPAN'99)

(社)日本食品機械工業会の主催による『'99国際食品工業展』が、6月8日から11日までの4日間、東京・有明のビッグサイト(東京国際展示場)で開催された。22回目となる今回の出展企業は520社で出展社数が最大規模であった昨年より減っているものの、来場者は10万人前後とのことであり内容的には昨年以上の熱気のある展示会であった。今年の開催テーマは『環境に優しいテクノロジー』で食品産業のみならずあらゆる分野で、世界的な規模からも種々の対策が求められている環境問題と食品共通とも言えるキーワードである『おいしさ』を結び付けたメインテーマで極めて現在の感覚にマッチしたものと思われた。また環境と関連性も強く、近年食品産業で大きな話題の1つで実用段階として進められつつあるHACCPも大きなテーマとなっており、この2つのテーマを中心にISO情報セミナー、特別展示コーナーも設けられ、併催されたプレゼンテーションでもこれらのテーマが半数以上を占める程であった。各ブースにおいても多く目についたものが、HACCPによる品質・衛生管理関連の展示であり、HACCP

展示会・学会報告

は昨年も大きな展示の柱であったが、今年は具体的な取り組みも更に進み、内容的にも質的にも昨年以上の印象を受けた。

大手のゼネコンやプラントメーカーのブースでは食品プラントの計画、建設、製造管理までの一貫性あるHACCP対応のエンジニアリング技術が展示されていた。展示内容は規模ある食品プラントの実績をベースに、HACCPと環境にやさしくを柱に、廃棄物を少なく、ゼロエミッションも目指し、きめ細やかな部分まで考慮されたエンジニアリング技術がプレゼンテーションにでも示されていた。こうしたプラント全体としての取り組みのみならず、品質・衛生管理機器として計測・分



会場風景

析・検査機器装置、クリーンブースなど個々の機器等においてもHACCP関連として、温度、圧力、流量などのデータ採取、制御、管理、記録を高性能・小型・低価格化が進む電子機器及びパソコンの活用が進んでいることも目を引かれた。

時間的余裕がなく駆け足で見学した今年の国際食品工業展であったが、メインテーマ通り、環境において素晴らしいテクノロジーとHACCPが印象的な展示会であった。〈森永エンジニアリング(株) 高瀬 敏〉

中国における用・廃水の膜処事情形

4月27日～29日に清華大学(北京)で開催された「用・廃水処理の膜利用に関するワークショップ」に参加し、関係機関を訪問した。このワークショップはフランスのリヨネーズ社(LyonnaisedexEaux)のアジア・太平洋地域担当の事業組織であるASTRAN(本部はマレーシア)が資金を提供し、企画は銭易教授ほか

清華大学の環境科学・工学系が行った。ASTRANの戦略には①ナレッジマネジメント、②技術移転と操業支援、③水資源の管理及び④主要大学とのネットワーク形成があり、このワークショップもこの戦略にそって行われたものである。参加者は約100人であり、基調講演は4件<中国側から「中国の膜技術の発展」(劉忠洲教授、生態環境研究中心)、「廃水処理における中国の膜利用」(銭易教授)があり、リヨネーズ側から「浄水処理における膜技術」及び「廃水処理における膜型生物反応装置」>、一般講演は26件<中国側14件(内企業関係3件)、リヨネーズ関係6件、国外側6件>で日本からは私と山本和夫教授(東大)が講演した。山本教授が講演した「日本における浸漬膜技術」は省エネルギー技術という観点から、中国でも流行しているようであり好評であった。

会議の合間に生態環境研究中心(センター)を訪問した。ここでは水環境に関するあらゆる研究を行っており、当工業会関係では各種用・廃水処理技術の開発、製膜技術、膜利用技術、凝集剤・吸着剤の開発などがある。研究所内に1995年設立された製膜工場(劉忠洲教授が社長)があり、UF膜モジュールと膜分離装置の製造・販売をしている。性能は先進国のものに比較して悪いが価格は1/2～1/3であり、主に食品、飲料水、工水の製造に用いられているようである。

最後に中国における海外との研究協力であるが、中国の巨大市場と優秀な頭脳を期待して、人材開発やネットワーク作りのために奨学金支給や研究助成をしている欧米企業が多いそうである。また生態環境研究中心にDIONE Xは部屋を借りており、研究費を毎年払っているようである。(このような例は多分野においても多数ある。)荏原製作所が環境関係の研究奨励金を出しているが、日本の各企業も欧米諸国だけでなく中国の主要な大学・研究機関とのネットワーク作りをもっと積極的に行う必要があるのではないかと痛感した。

〈松本 幹治〉

'99春期見学・講演会報告

キッコーマン見学講演会に参加して

平成11年第2回目の行事である「食品製造工場の見学と講演会」は5月27日午後、キッコーマン(株)野田プラントにて50名が参加し行われた。

まず講堂で行事委員の小波氏が主催者代表の挨拶をされ、キッコーマン(株)野田プラントの熊切工場長に工場概要の説明を受けた。キッコーマン(株)の国内工場は千歳・野田・高砂の3地域で、野田には醸造工場2つとボトリング工場2つの計4プラントがある。野田プラントはISO14000を食品業界で2番目に早く取得し、品質管理や環境面では常に先端を走る醤油工場である。醤油の国内年間生産量は110万klでビールの750万klには及ばないが、日本酒の120万klに近いとのこと。キッコーマン(株)は、海外にもアメリカ・ブラジル・台湾・シンガポールに工場を構え、その消費量は今後も増える見込みで、特に中国市場には期待出来るそうである。キッコーマン(株)古川氏の冒頭説明に引き続き、野田プラント内の「もの知り醤油館」に移動し一般来場者用の映画を観たあと、館内を係の女性に案内して頂いた。館内では製麹室、仕込みタンク、充填・圧搾室、をガラス越しに見学でき、充填工程をビデオで確認した。非常にシンプルで



古川氏の講演

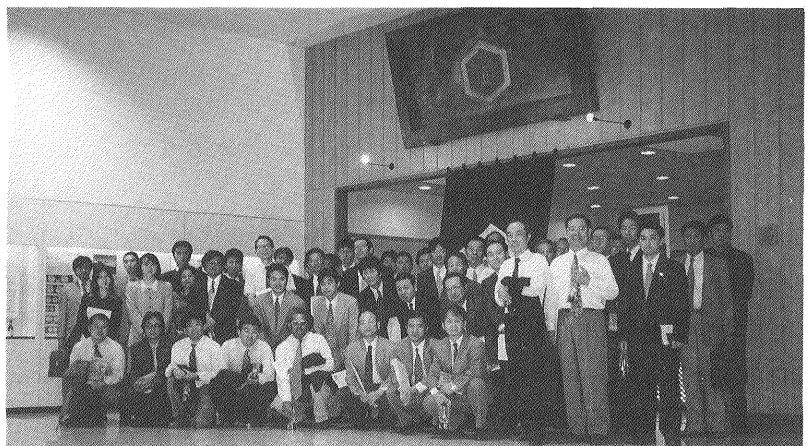
分かりやすい見学コースで醤油の製造工程が良く理解出来た。

最初の講演は、キッコーマン(株)バイオケミカル事業部の細山氏による「水に着目したフードテクノロジー」。細山氏は、当初講演予定だった水と食品の関係を専門に研究されている浜野氏に替わって急遽代役を務めた。最近の細山氏の研究内容「ブドウ種子抽出物(プロアントシアニジン)の研究開発・マーケティング」を中心に、

当初のテーマ「水に着目したフードテクノロジー」と結び付けての講演であった。イントロとして水とアルコールの相互作用から始まり、水溶性酸化防止剤へと話題は移り、プロアントシアニジンの概略説明があった。赤ワインがブームになり、それに含まれるポリフェノールの抗酸化作用は一般の消費者にも認知されてきている。活性酸素やフリーラジカルを消去出来る各種天然の抗酸化物質は、機能性新素材として注目されており、細山氏の研究は今後も非常に期待を持たせる内容であった。

次の講演は、キッコーマン(株)生産技術部 古川氏による「醤油製造における清澄ろ過技術」。本醸造醤油の製造法、圧搾による固液分離、生醤油の珪藻土ろ過、火入れ醤油の膜ろ過の説明があり、新しい珪藻土ろ過法と膜ろ過法の比較検討が行われた。古川氏が提案される珪藻土リサイクルによる廃珪藻土の削減化(再利用化)は、弊社など珪藻土メーカーにとっては売上高減にもつながる厳しいテーマではあるが、それ以上に循環型社会の構築に向けて珪藻土メーカーとして貢献できうる命題という意味合いの方が大きい。LCAで見た場合の珪藻土の持つ優れた経済性を今後も生かすべく、弊社も可能な限り努力を続ける所存である。我々珪藻土メーカーに対してだけでなく、膜ろ過における今後の省エネルギー対策についての講演もあり、ろ過に携わる企業の一員として非常に考えさせられる内容であった。

<昭和化学工業(株) 石橋 健蔵>



参加メンバー

技術委員会活動報告

規格・標準委員会設立にあたって

最近技術委員会で検討がおこなわれているものに「LCP」と「規格・標準化」がある。前者は技術委員会の中に分科会をつくり活動を行って行くことが決定しており、後者は技術委員会とは別に「規格・標準委員会」を作りここで検討して行くことが決まりつつある。いずれも最終決定は理事会の承認待ちとなっている。ここでは、「規格・標準委員会」設立に向けての技術委員会での話し合いの経緯ならびに「規格・標準委員会」の展望について述べてみたい。

規格・標準化活動の必要性は実は最近はじまったことではなく、当工業会設立当初から課題として論じられてきた。昨年4月に行われた第2回技術委員会で委員長の松本教授から、「本テーマに関しては会員の中でも進め方について意見が分かれているようであり、今後どのような進め方が良いか議論したい」との提案があった。以後最近まで技術委員会で話し合われた内容を、議事録をもとに述べてみる。まず、はじめの段階で「試験法と製品の規格・標準化の必要性」が論議された。これについては、総論的には賛成であるが、各論となると、色々問題が出てきて何をいつからやるかと言った各論には至っていないというのが現状である。この話し合いで主に問題となったのは、標準物質をどのように決めるのかということ、及びメーカーにとって「差別化」をはかって行くことと標準化を進めることの矛盾であった。ユーザー側からは、ある分野では製品の選定基準となるようなものが現状では無いに等しく、いくつものテストを行なわざるを得ず不便であるとの意見が出た。これらについては、結論は出ておらず、実際に規格・標準の作成に入った段階で検討され、解決される問題であろう。次は業界の実態調査についてである。これは、このプロジェクトを進めて行くうえで、現状がどうなっているかの実態調査の必要性が提起されたことをうけて、業界内での分野ごとの調査を行うこととなったもので、つぎの業界が選ばれ、国内国外を含めた調査報告が行われた。a)ろ過機、脱水機 b)プレフィルター

c)ろ過膜、分離膜 d)薬品処理 e)測定機器 f)吸着、イオン交換 g)バルブ、管材 これらの報告は今年に入ってから行われ前回の会議で報告を終えた。全般的にいえることは、公的機関で規格化されているものは少なく、業界やメーカーの自主規格によっているものが殆どであるということである。また、これらの話し合いの中で、「用語」の統一の必要性も提起された。用語の統一は規格・標準の作成において重要なものであり、比較的作業がしやすいことから、まずこれから始めて行くことを決めた。具体的にどのように進めて行くかについても話し合いが行われた。当初は技術委員会の中に用語部会を設けることが検討されたが、「規格・標準委員会」を設けてその中に用語部会を置いた方がよいということになり、現在この方向で話が進んでいる。最後に今後の展望について述べてみる。話し合いの中で、問題となったものに、規格にはなっていないがあるメーカーの製品で既に良く使われているものについての規格である。いいかえれば、企業間の競争でシェアを獲得し標準となってしまう、いわゆる「デファクト標準 (de facto standard)」である。当然のことながら、工業会が目指すのは、ISO規格のように公的な機関において定められた手続きに基づき作成される、いわゆる「デジュール標準 (de jure standard)」のような性格をもったものでなくてはならない。何から手がけて行くかの詳細はこれから議論されることであるが、私案を述べさせていただければ、当然のことかもしれないが、公的な規格がなく規格作成が求められている分野で、できるところから作って行くことであり、この工業会会員が使って行くものである。そしてこれらはJISとなり、ISOとなることが理想と思う。ところで、よく議論されるものに、ここで進められている規格・標準化は、工業会会員のためのものかあるいは、ユーザーのためのものなのかということがある。この辺は工業会の目的あるいは定款をもとに、検討すればおのずと方向は定まるであろうと思っている。

(日本ミリポア(株) 野尻 泰弘)

企業紹介

常盤株式会社

当社は、明治39年(1906年)に創業し、化学品専門商社として、化学工業薬品、セラミックス製品、合成樹脂等を取り扱っております。清澄化技術の発展は、製造プロセスの技術革新に欠くことのできない要素であり、また近年、環境保全、省エネルギー、リサイクル問題の関心が高まっています。当社では、清澄化関連製品を主に取り扱う高機能商品部を設置し、液体と空気清澄化分野に注力しております。液体清澄化分野では、中空糸膜の特性を応用した製品の開発に取り組み、吸収式冷凍機用溶液の精製ろ過装置やブラインの精製ろ過装置など(株)クラレと共同で製品化した特化製品を、また超純水用途では、半導体製造プロセスにおける供給水質の品位確保の一翼を担う機能膜を販売しております。空気清浄分野では、高性能エアフィルターでの展開を進めております。培ってきた商社機能と製品開発のノウハウを基に、お客様のご要望に応えられますよう新規製品の開拓にチャレンジしてまいります。(宝田 勲生)

日曹エンジニアリング株式会社

昭和37年に日本曹達(株)より分離独立した、ファインケミカル・プラントのエンジニアリングを最も得意とし、多方面の分野で活躍する総合エンジニアリング企業です。合成反応、分離精製、粉粒体取り扱い、物流、制御などの要素技術をベースとし、PIS(プラントインテグレーションシステム)パワーを発揮して各種のプラントを創造的に建設しております。特に、技術研究所での自社プロセス開発、応用研究、技術導入などで新しい技術獲得に努めており、活動の範囲は一般化学の範囲にとどまらず、医薬品分野、食品分野、機能性粉体分野、半導体製造分野など広範囲に及んでいます。顧客に信頼される品質システムで広く社会に貢献することを宣言した当社は、近年の流れに沿ったクリーンエンジニアリング、環境エンジニアリングに注力し、液体清澄化技術とその周辺技術に大きな関心を寄せています。(小波 盛佳)

アクアス株式会社

当社は昭和33年、総合水処理メーカーとして創立以来、上水・排水処理、環境浄化、空調水処理等における水処理薬品・水処理装置等、生活や産業のニーズに応じた水づくりで幅広く事業を展開して参りました。最近では、環境への影響を考慮した物づくり、省エネルギーをキーワードとした要求が高まりつつあります。水処理においても廃棄物量の削減や水の再利用等、ユーザーニーズが多様化しつつある中で、当社としてもあらゆるニーズに答えるべく商品・サービスの充実を図っております。この様な中、液体清澄化技術はキーテクノロジーとしてなくてはならない存在となっており、当工業会とともに、清澄化技術を幅広く発展させることができればと考えております。

(市川 真治)

桜エンドレス株式会社

当社は、「桜測器株式会社」として1955年設立、国産タンクゲージ第1号を世に送り出して以来、現在はエンドレス+ハウザー社(スイス本拠地)のグループ会社「桜エンドレス株式会社」として、自社開発製品(タンクゲージ)とエンドレス+ハウザーグループ開発製品(分析計、レベル計、流量計、圧力計、露点計、ペーパーコントロール)を販売している総合計測機器メーカー販売会社です。

Nothing beats know-howのコンセプトを基本にR&Dを充実し、石油、化学、医薬、食品分野のプラントに幅広く適応する計器を揃えております。またエンドレス+ハウザーのグループ会社であるウェット・ヴァレック社製のし尿・ゴミ・産業廃棄物処理向けバイオガス製品を取り扱っており、嫌気性消化システムの設備においてメタンガスの処理に関する広い範囲の製品を提供致します。現在最も社会的関心を集めている環境問題の軽減に貢献できるよう、これからも更なる努力をして参りますのでよろしくお願い致します。

(牧井 司)



ブレイクタイム

各委員会等活動報告

当工業会は、会員数の拡大とともに各委員会の活動も活発に行われています。以下、今年に入ってから幹事会、各委員会の開催日程および議事概要を報告します。尚、理事会活動につきましては、そのつど本誌にて報告しておりますので割愛致します。

幹事会

開催日：1/28 2/23 3/18 4/20 5/27 6/25

議事概要：工業会パンフレット/ニュースレターNo.7/LCAシンポジウム/技術委員会から幹事会への出席者の承認/キックマンへの見学会/雑誌への掲載計画/基礎講座(Ⅱ)の検討など各委員会による実施事項の検討、及び承認

技術委員会

開催日：1/20 3/11 4/14 5/19 6/23

議事概要：基礎講座(Ⅰ)アンケート調査報告/基礎講座(Ⅱ)の企画・検討/規格・標準化について各グループの活動報告/LCP(LCAを含む)分科会の運営/「化学装置」等、雑誌への記事内容の検討

広報委員会

開催日：1/19 2/18 3/12 4/16 6/11

議事概要：年間計画の立案/ニュースレターNo.7の編集/工業会案内パンフレット制作に関する打合せ/工業会ホームページ開設の検討

行事委員会

開催日：1/26 以降随時、メールあるいはFAXによる打ち合わせを行っている。

議事概要：行事委員会と行事の進め方/LCAシンポジウム実施について/5月見学・講演会(キックマン)の計画・実施/8月講習会(基礎講座(Ⅱ))の計画

国際交流委員会

開催日：5/26(初回)

議事概要：今後の活動内容について/正副委員長の推挙/アヘマ視察団実施

総務委員会

開催日：1/18 2/16

議事概要：講演者や専門家の協力依頼に対する費用等、規約の検討/分科会の具体的運営と分科会の規定化/総務委員会の具体的運営/委員会規定(案)の検討、修正/事業活動の収入、支出に関する規定(案)の収入と出項目の分類と内容検討

神保町界限食べ歩き(其の二)

食べ歩きをしていると、時々おいしい店や雰囲気の良い店に出会う。それだけで十分報われているはずだが、ちょっと欲も出る。こんな調査?をやっている、載せてあげますよと言えば、きっと「今日のお代は結構です」という店もあるに違いない。いや、そうと次のための割引券ぐらい渡してくれるかもしれない、なんていう期待を持ちたりする。それが、実際にはまるでなし。どこでも、「あそうですか」か、「ほう」で終わってしまう。若い従業員は宣伝に無関心、年輩の経営者はインターネットなんてさっぱりということか。ちょっとサービスすればいいこと書いてあげるのに。おっと、そんなことではボランティア精神にもとる。神保町界限といっても、実は様々な地区がある。安い店から高い店まで、うまい!店からまずい!店まで。その中で特にうまくて安い店が多く集まっているのが、ホームページの範囲、即ち我が社を含む範囲である。と書くと他から苦情がでるかな。もちろん界限には高くてもおいしい店もある。掲載範囲から少しはずれたバラライカなどは最安のランチが1,800円と高いが、夜はともそんな値段では食べられないので、むしろ割安。普段と違うリッチな気分になれるだけでも価値がある。そんな店にも、たまには奮発して行ってみたい。最近の不景気で、味や企画に工夫を凝らす店が多くなった。ある高級中華料理店は安いバイキングを始めた。夜の不調をカバーするために昼食を始めたスナックなどもある。神保町でなくても、気分転換を兼ねて少し遠くまで歩き、新しい食べ処を開拓してはいか? <神保町界限食べ処の載っている日曹エンジニアリングのホームページは、
<http://www.nisso-eng.co.jp>> (小波 盛佳)

No.	店名	分類	昼	夜	席数	休日	特徴	昼の代表メニューと価格 (先頭数字は調査月)
A11	一福	○和	×					夜のみ
A12	餃子屋	●中華	安		24*2F		大衆的	9801チャーハン630,中華丼680,タンメン650,ラーメン480
A13	いもや(天定)	○天	特	安	15		目の前天ぶら、人気大	9802天定(汁付)600,エビ定(800),単品追加100程度
A14	伊候	●中華	特	安	10		大衆的、カツインナーのみ	9802ラーメン380,チャーシューメン530,チャーハン480
A15	いもや(かつ)	○かつ	安		15		ならば	9802とんかつ定700,ヒレカツ定900
A16	横(和食)	○和	安	安	16*2F	日祭	田舎定食風	9801牛豆煮定850,さば味噌定650,他定食600~850
A17	横(洋食)	●洋	安		20		若者向き	9802しょうが焼き盛り合わせ650,ハンバーグランチ各780
A18	しゃー	○カレー	特	安	15		大衆的、カツインナーのみ	9802カレーライス350,カツカレー500,コロッケ、フライ、チキンカレー各450
A19	北前そば高田屋	●そば	特	安	60	無休	そば専門、種類が多い	9802かけ500,海鮮かきあげそば1150,親子そば750

グルメ情報データの表示(部分)

行事予定表

1999年第3会行事「液体清澄化技術基礎講座(II)」

当工業会では、昨年に引き続き、基礎から中級程度までの技術を学びたい方を対象とした、液体の清澄化に関する基礎技術の習得を目的とした基礎講座を企画いたしました。是非ご参加くださいますようお願いいたします。また、講演終了後、技術情報などの交換のために講師を囲んでの技術交流会を行いますので是非ご参加ください。

日時：1999年8月27日（金）

会場：日曹エンジニアリング(株)（東京都千代田区神保町1-6-1タキイビル）4階第1会議室

スケジュール

1. 9:30～10:45 「液体清澄化技術概論(II)」
横浜国立大学教授 松本 幹治 氏
 2. 10:50～12:05 「砂(深層)ろ過技術」
(株)トーケミ部長 佐藤 廣 氏
(昼食60分)
 3. 13:05～14:20 「イオン交換技術」
日本錬水(株)主任研究員 寺山 弘晃 氏
 4. 14:25～15:40 「活性炭吸着技術」
武田薬品工業(株)部長 竹内 辰郎 氏
(休憩15分)
 5. 14:55～17:10 「膜カートリッジ式ろ過器」
日本ポール(株)専任部長 佐藤 恭司 氏/
部長 三浦 洋郎 氏
 6. 17:30～19:00 「講師を囲んでの技術交流会」
- ※申し込み方法は追って送付される案内状をご覧ください。

新製品コーナーのお知らせ

本誌では新企画として会員各社の「新製品紹介」を企画しております。掲載は次号からを予定しておりますので本号(8号)発刊後(7月)より申請を受付ます。掲載順は原稿先着順といたしますが、紙面が限られているため掲載まで多少の時間がかかる場合も予測されます。それにより、新製品情報としての意味が失われる可能性が生じる場合は確認を行いながら調整して参ります。新製品紹介を希望する会員企業は新製品概要200～250字と写真1点、社名、担当者名(問合わせ先)を添えて広報委員会下記宛て申請下さい。

申請先：富士フィルター工業(株) 広報室 ト部兼好 宛
〒103-8308 東京都中央区日本橋室町2-4-3
TEL.(03)3241-4201 FAX.(03)3246-1288

連絡板

副会長が勲五等双光旭日章を受章

今年春の叙勲褒章受章者の発表の中で、当工業会副会長である日本フィルター(株)社長・橋本康彦氏は勲五等双光旭日章受章の荣誉に輝いた。その推薦団体は会長を努める(社)日本表面処理機材工業会で、旧来の表面処理業界の5団体を強い指導力により統合を推進し、その後の工業会組織の整備・充実に貢献するとともに表面処理業界における環境保全対策に尽くした功績により受章した。なお同氏は、昭和59年春に産業振興の功績により藍綬褒章を受章している。

編集後記

ニューズレターも今回で第8号となります。想えば'97年の秋に第1号を創刊してから矢のように時が過ぎた感があります。ご承知の通り、本誌は現在8ページ編集となっておりますが、工業会の活動が活発化している証であると思っています。会員の皆さんの意見が反映された内容を模索しながらの作業ではありますが、10号発刊を目安として一度アンケート調査を実施することを考えています。会員の皆様には今後ともご協力を期待致します。

編集/発行：日本液体清澄化技術工業会 広報委員会
住所：横浜市戸塚区上矢部町2107-3
TEL (045) 811-1533 FAX (045) 813-9450